

15 明治5年6月21日 菊池長閑宛

第七号

第五号玖平より相達致拜披候

皆様御無事にて御目出度存候私も依然ニ候間御省慮奉希候、単物御蔭にて相用居候、二十円にて七月迄差出置候委細ハ第六号にて申上候筈、登竜丸ハ御老母様之御氣ニ入候由大慶罷在候、本宿ハ主上之御供にて西海ニ赴候追々ハ東山北陸等ニも御供可致候、那珂先生ハ深川御蔵屋敷ニ住居候、佐藤以下誠ニ論候得ハ監守盗ニ可相当併糺問振ハ左様ニ無之哉ニ相聞得候得共何れも金高ハ斬首より下ニ有之間敷と存居候、先達川村氏へ御伝語相願候御資送一條猶又難有仰を実ニ感涙ニ不堪何分ニも勉勵之外無之と存居候、片栗半斤御遣被下御蔭にて水当りを防候、(抹消)
橋場より之干題如何ニも御多忙中御迷惑ニ可有之と推察仕居候、

此節義塾之建候事夥敷候得共□立ハ追日閉塾ニ相成候何れも皆
目的ハ書生ノ利を貧ニ□□実ニ報國之為メニ設候者無之か故ニ
も可有之也、芳原を始メ兩國辺ニ至まで客之氣を苦ミ頻ニ花火
を揚候得共頓て利ヲ得兼候由新界之官員ハ放正官校之書生ハ規
則ニ被縛私塾生ハ官費ニ放候等此之根元ニも可有之也如斯ハ追
々真之文明ニ趣と可申哉柳又料理屋等ハ職業を失ニも至徳川家
之政ニ劣るとも可申也可笑可悦又可悲カ実ニ混雜之話候頓首

六月廿一日

(長閑注記)

〔第七号也六月廿一日附之右返書比方第九号八月朔日附〕

〔ニテ翌二月出大川へ横田を以頼之〕